

荒木恵作 「おれのボランティア体験記  
試練を越えて」

米田キク子 啓ちゃん、お元気ですか？ あの時はありがとう。わたしもやっと仮設住宅に入れることになり、今引っ越しを終えたところです。引っ越しと言っても、荷物なんてそんなにないんだけどね。あの時のことを思い出すと、今でも体が震え、胸が痛みます。でも、啓ちゃんが言ってたように、頑張らなくちゃね。一からやり直したけど、頑張ってみます。応援しててね。あと、啓ちゃんのお友達が言ってた神様のことを、もう少し知ろうと思って、近所の教会に行ってみることにしました。ではまた書きます。 8月7日 米田キク子

上村啓太モノローグ あれからもう半年か…。

ナレーション おれの名前は上村啓太。青春大学4年生。1月に起こった阪神大震災のことはだれもが知っていると思う。あの恐ろしい地震があってから2か月たった春休みのある日、プロジェクトチームを作って被災者の人々のところにボランティアに行くという企画が学校から発表された。後期のテスト日が2月の中旬からだったので、テストが終わってからの2週間から3週間というプログラムだった。最初乗り気ではなかったが、幼なじみの加藤信吾に強引に誘われ、行くことになった。そして神戸で会ったのが、手紙をくれたキク子おばさんだった。

(効果音) (ブリッジ音楽)

会長 では説明会を始めます。まず持っていくものは洋服、下着、缶詰などの食物。それから懐中電灯も忘れないでください。あとは寝袋を用意してください。あちらでは、主に大きい破損物を取り除く作業があります。そして終わったあとは、被災者の方とお話をしてあげてください。被災者の方は肉体的にも疲れています、精神的にはもっと疲れています。ですから、積極的に話して、励ましてあげてください。

ナレーション 1時間半の説明会が終わり、いよいよ来週出発ということになった。参加者は80名。その中で8名ずつグループを組み、作業に取りかかるということだった。おれは信吾と同じグループになっていた。それから1週間がたち、テストも無事に終わり、明日が出発という日になった。

加藤信吾 啓太、準備できたかよ。

啓太 うん、バッチリ。もう明日なんだよな。

信吾 ああ、いよいよだな。それにしてもテストはボロボロだったよ。信じらんねー。

啓太 おれもだよ。もっとやっておけばよかったと今更ながら思うな。

信吾 明日からは頭の勝負じゃなくて、体力勝負だもんな。頑張ろうぜ。

ナレーション　こいつが幼なじみの加藤信吾。小学校から中学、高校と全部一緒だ。そしてなぜか大学まで同じになってしまった。ここまで来れば“腐れ縁”も立派なもんだ。信吾とおれの違うところと言えば、信吾が教会に行っているということだ。おれも小さいころは一緒に行っていたが、今はもうごぶさただ。信吾は何でも中3の時に、バプ何とか… 要するに洗礼を受けて、クリスチャンになったらしい。でも相変わらず信吾は信吾だ。変わったのは、このボランティアみたいに、何か人の役に立ちそうなことに、やたら熱心になったことだ。

信吾　啓太、起きてんのか？ 行くぞ。

啓太　おお、今行く。じゃ母さん、行ってくるよ。

ナレーション　次の日の朝早く、おれたちは学校へ向かった。学校にはもうすでにみんなが集まっていて、点呼が取られているところだった。それからグループに分かれて車に乗り込み、神戸へと向かった。まだ阪神地区の電車はストップしたままだったからだ。おれたちのグループ・リーダーは富永香だった。

長い道のりを走り、ようやく神戸に入った。そこには信じられないような光景がおれたちを待っていた。

香　ひどい…。こんなにひどかったなんて。

信吾　ここがああ神戸なんだよな…。

香　わたしたち、本当にボランティアなんてできるのかしら…。

ナレーション　みんなが口々に言うのを背中で聞きながら、おれはハンドルを握る手が震えているのに気がついた。本当に目の前に見える光景はひどいものだった。テレビで見た以上に激しく家は壊れ、道は波を打っていた。この町だけ終わりが来たのではないか、そんな印象さえ受ける光景だった。神戸の中心地より少し外れた所が、おれたちのボランティア活動の場だった。着いてから皆の荷物を降ろし、テントを張り、リーダーの香の指示を待った。

富永香　今日はこれから、崩れている家に何か所か行き、がれきを取り除く作業をします。着いたばかりで疲れているかもしれませんが、頑張ってください。

ナレーション　おれたちは軍手を手にはめ、香のあとについて歩いていった。行く途中、さまざまな家の前を通った。ヒビが入っている家、半分崩れてしまっている家、ほとんど壊れている家、家だか何だか分からない木材の重なっている場所。そこには瓶に入っている一輪の花が置いてあった。きっと、家族のだれかが亡くなったのだろう。その日は少ししか手伝いはできなかったが、体のほうはすっかり疲れていた。

信吾　啓太、これからちょっと出かけないか？

啓太　いいけど、どこだよ。

信吾　うん、さっき知り合った人なんだけど、あとで会いに行くと言っただけだ。

啓太　じゃ行くか。

ナレーション おれたちはテントから20分ぐらい離れたところにある避難所へと向かった。

信吾 こんばんは。

おじさん 信吾君、こっちだこっち。

啓太モノローグ え、こんな所に住んでんのかよ。全然家らしくないじゃないか。プライベートも何もあったもんじゃないな。

ナレーション それは、大きな部屋をベニヤ板で幾つも区切って、その一つ一つに1家族ずつ入って住んでいるという、町の集会場だった。

おじさん びっくりしただろう、こんな所で。

信吾 はい、正直言ってびっくりしました。あ、僕の友達の上村啓太です。

啓太 こんばんは。

おじさん こんばんは。よく来てくれたね。これが息子の民雄。小学3年生だ。

民雄 こんばんは。お兄ちゃんたち遊ぼう!

おじさん ダメだよ、民雄。もう今日は遅いし、お兄さんたちは疲れてるんだから。

民雄 あーあ、つまらないな。じゃ明日遊ぼうね。

信吾 うん、遊ぼう。約束だ。

民雄 わーい、やった!

おじさん いいのかい?

啓太 大丈夫ですよ。その代わり仕事が終わってからだけど。

おじさん 助かるよ。この辺の子供たちも、学校はこんなになっちゃだし、遊ぶ所なんてないし、かわいそうなんだよ。

ナレーション そう言うと、おじさんは今のみんなの状況、そしてどのようにして、こうなってしまったかを話してくれた。聞いているだけでもどんなに大変だったか分かった。おじさんと別れてテントに帰る途中、香に会った。

香 あら、信吾君たちじゃない。どうしたの?

信吾 ちょっと知り合ったおじさんがいてさ、話してきたんだ。

香 そうなの。わたしもよ。地震の話を夢中で聞いてたら、こんな時間になっちゃって。「続きはまた」って言って帰ってきたの。

ナレーション おれたちは一緒に帰りながら、今日おじさんと話してきたことを口々に言った。香も同じように話してくれた。

香 わたし、思ったことがあるんだけど、おばさんの話を聞いててね、本当にこの地震が恐ろしいものだったんだなって分かった気がする。新聞とかテレビとかで流されているニュースよりも、もっとひどいものだって。知ったかぶりで来ちゃったんじゃないかって反省させられたんだ。

信吾 うん、おれもそう思った。何か自分たちが被災者の皆にしてあげるっていうような気持ちで、ここに来ちゃったような気がするよ。

ナレーション おれは何も言えなかった。なぜならおれはただ手伝うために来たんだし、それ

以上のものを求められても困ると思っていたからだった。みんなは考えすぎだと心の中で思っていた。状況が分からないままで来てもいいじゃないか。やることだけやって帰って何が悪い？ それ以上のことをこの人たちだって期待しているわけじゃないはずだ。そう自分に言い聞かせながらテントに戻った。そして吸い込まれるように眠りに落ちていった。

次の日もよい天気だった。早速、おれたちは昨日の続きに取りかかった。

信吾 啓太、そっちのほうを持ってくれ。

啓太 分かった。じゃあ行くぞ。

ナレーション おれたちは、家の柱らしきものや、家具の壊れたものなどを次から次へと運び出した。窓ガラスなどが割れていたりして危なかったので、慎重に作業をした。

香 はあー、重〜い。

啓太 何お嬢さんしてんだよ。香が力持ちなことは、おれたちが一番よく知ってるんだからな。ファイト、ファイト。

香 はーい、頑張ります。

啓太 そうそう、まずリーダーが頑張らなくちゃ。

信吾 そうだよな。おれたちのほうが弱いんだから。

香 何よそれ。2人とも、分かてるの？ それが女の子にモテない原因なのよ。

啓太 言えてる。(一同笑い)

ナレーション おれたちは、和気あいあいと仕事をしていった。仕事をしているうちに、何かがおれの心の中で変わっていったのを感じていた。何かは分からない。でも確かに変わっていったのだった。何日かいるうちに、おれたちの仕事も増えていった。仕事のあとに子供たちと遊んだり、勉強をしたりする時間をつくったのだ。それは、学校が避難所となっているため、子供たちの場所がないからだった。そして同時に、被災者の人とも話をする時間を持った。大変だったが、その人たちとも仲良くなって、楽しい、充実した時間が過ぎていった。ある夜、肌寒さにふと目を覚ましたおれは、外に出た。木の陰に信吾がいるのが見えた。近づいてみると、何かを小さな声でささやいていた。それは教会でやるあの“お祈り”だった。

信吾 神様、ここの人たちを助けてください。みんな疲れ切っています。今まで持っていたものがすべて奪われ、何のために生きてきたのか分からなくなっている人が多いのです。おれにできることは何でしょうか？ 教えてください。

啓太モノローグ そんなにここの人のことを思ってるのか。でも神様にお祈りしてどうなるんだ？ 信吾は一生懸命やっている。これ以上に頑張らなくたっていいのに。

ナレーション そうなことを思いながら、邪魔をしないよう、そっと草むらのほうへ行き、そのまま少し散歩することにした。腕時計は夜中の2時を指していた。暗くても、ひど

い状態は目に入ってきたが、辺りは静まり返り、ひんやりと冷たい風が吹いていた。ふと前を見ると、人影らしいものが見えた。

啓太モノローグ

こんな時間に、だれだろう？

ナレーション

何となく不審なものを感じたおれは、その人影のあとを追った。5分ぐらい歩いただろうか。人影が川に架かった橋のほうへと行くのが分かった。何か心が騒ぎ、このまま帰るわけにはいかなかったおれは、その人影に近づいていた。月明かりで、女の人だということが分かった。変に思ったので、声をかけようとしたその時だった。

啓太

あ！

(効果音)

(川に飛び込む水音。)

ナレーション

その女の方は、橋から身を踊らすと、5、6メートル下の、流れの激しい川への落ちていった。

(効果音)

(激しい流れの音。)

<後編>

ナレーション

おれ、上村啓太。青春大学4年生。おれは3年の春休みに、阪神大震災のボランティアチームとして、神戸に行っていた。そのボランティアは、がれきを運んで片付けたり、子供の勉強を見たりというものだった。ある夜中に、おれは眠れなかったので散歩に出、ぶらぶら歩き始めた時、一人のおばさんを見かけたのだ。不審に思ったおれがついていくと、おばさんは、おれの目の前で、橋から川へと身を投げてしまった。

(効果音)

(ドボーンという水しぶきの音。)

啓太

おばさん！

ナレーション

おれは急いで土手を降りると、夢中で川に飛び込んだ。幸い川幅はそれほど広くなく、岸のほうは浅かったので、おれは何とかおばさんを捕まえて、岸に引き上げることができた。

キク子

放しておくれ！ 放して！ 死ぬんだ、もう死ぬんだ！

啓太モノローグ

ダメだ！ 放したらおばさんはまた川へ行ってしまう。

ナレーション

そう思ったおれは、しっかりとおばさんを抱き抱え、放さなかった。おれは、びしょぬれのままでは体が凍えると思い、おばさんをテントに連れていくと、寝付いたばかりの信吾と香も起こして、火をたいた。やっと体が温まったところで、おれは口を開いた。

啓太

何でこんなことをしたんですか？ 震災で無事だったのに…。

キク子

あんたに何が分かる？ わたしはね、もう生きる気力がなくなっちゃったんだよ。もうほっといとくれ。

啓太

ダメだ。いくら生きたくなくなっても、死んじゃったら何にもなんないじゃないか。

自分で死んじゃったら、神様が天国に入れてくれないよ。

ナレーション 自分で死んじゃった。教会に行っていないおれの口から、神様なんて言葉が出てくるなんて、想像もしていなかった。しかし今はそんなことを考えている場合じゃない。とにかくこのおばさんを説得しなくちゃいけない。

キク子 神様だって？ フン、そんなのいるもんか。どこに神様なんているのさ。神様がもしいるんだったら、何でわたしがこんな目に遭わなきゃいけないんだよ。神様なんて…。神様なんているもんか！（泣き崩れる。）

ナレーション 泣き崩れるおばさんを目の前にして、おれたちは何も言うことができなかった。おれは心の中で思っていた。きっとこの人は、地震で大きな被害を受けたんだ。家がひどく壊れたのかもしれない。ひょっとして、家族の中のだれかが…。これまでの数日間、おれが相手にしてたのは、がれきと、元気な子供たちだった。こんなに深刻そうな被災者に会うのは、初めてだったのだ。この現実を前にして、おれはどうすればいいのか分からなくなっていた。今まで助けてやっただと思っていたうぬぼれの自分が見えてきて、情けなく思えた。香も同じ気持ちだった。

香 おばさん、ごめんなさい。わたしたち、何もしてあげられない。でも、おばさんのこと、もっと聞きたいのよ。何も力になれないかもしれないけど、話せば少しは楽になることだってあるわ。話して。

ナレーション おばさんはしばらく黙っていたが、やがてポツリポツリと話し始めた。

キク子 わたしは米田キク子というの。もちろんここで生まれて、ここで育ったんだよ。わたしは結婚3年目に主人を亡くしてね。息子が1人いたんだけど、その子を育てていくために、一生懸命働いた。幸いうちは八百屋をやっててね。女手でも働けたんだよ。そして息子も大きくなって、ちゃんと高校、大学まで進めた。今年卒業するはずだったんだよ。親バカかもしれないけどね。いい子だった。しょっちゅうわたしのことを心配してくれてね。仕事も学校に行きながら手伝ってくれた。本当にわたしの宝物だったよ。でも… あの日、わたしが八百屋の仕入れに行っていた時、地震が起こったんだ。息子はうちで寝ていた。わたしの方は帰りの車の中だったんで助かったけど、もしかしたら家が危ないんじゃないかと思って、飛ばして帰ったよ。家の前のおりは、電柱や塀が倒れ、車は通れない。もう夢中で車を飛ばし、走って家に着いてみると、案の定、家はつぶれていた。それでも息子だけは助かってほしいと思ってね。必死で木の板をどかしたんだ。目に入ってきたのは、タンスの下敷きになっている息子の姿だった。頭からは血が出ていて、もうピクリとも動かなかった。即死だったんだろう。死んでいると分かって、わたしはタンスを持ち上げ、息子を引っ張り出した。まだ温かい息子の体を抱いて、わたしは神様をのろったよ。何でこんなことをするのか、何でわたしから一番大切なものを取り上げたのか。怒らず

にはいられなかった。泣いて泣いて泣き続けて、お葬式も自分では何もできなくて、町内会の人たちにやってもらった。それからの1か月、自分が生きているのか死んでいるのか分からなかった。何をしても、ただむなしくてさ。どうせもう何も残らないんだって思って。そして死にたいと思った。生きていてもしょうがないと思ったんだよ。あんたたちに分かるかい？

ナレーション おれも一人息子だ。おれが今死んだら、おふくろはどうするだろう。そう思ったら、このおばさんの気持ちか、ジーンと胸に迫って、おれも涙があふれてきた。その時、それまで黙って聞いていた信吾が口を開いた。

信吾 おばさん、僕はおばさんの痛みをちょっとしか理解してないかもしれない。でも神様は、きっとおばさんの痛みを分かってくれるよ。

キク子 神様なんかいないよ。もしいたとしたら、何でこんなことをするんだい？

信吾 僕にもそれは分からない。でも神様は、意味なくこんなことをなさるお方じゃないよ、絶対。

キク子 どうしてそんなことが分かるんだい？ あんたたちはこの被害に遭っていないからそんなことが言えるんだよ。ここのみんなが苦しんでる。何で阪神の人たちだけが、こんな目に遭わなきゃいけないんだい！

信吾 うん、僕たちはおばさんみたいに被害に遭っていない。だからこんなこと言えるのかもしれない。でもどうしても何かしてあげたかった。僕たちにできることがないかって考えたんだ。実際にこっちに来て、この目で町の人に接しているうちに、僕はそれが何なのか分かってきた。がれきの掃除だけじゃなくて、子供の勉強を見ることだけじゃなくて、本当に必要なのは、神様のことを伝えることじゃないかって。

キク子 でもわたしは信じないよ。わたしだけがこんな目に遭うのは不公平じゃないか。わたしにはもう生きる希望も何もかもなくなってしまった。この苦しみはだれにも分かりやしないよ。

信吾 僕が持っているこの聖書という本にはね、おばさんのような人が出てくるんだ。

キク子 わたしのような人？

信吾 うん、その人はヨブっていうんだ。

ナレーション そう言うと、信吾は聖書の中に書いてあるヨブという人の話をした。

信吾 このヨブという人は、おばさんのように、ある日を境にすべてのものを失ってしまうんだ。家も、全財産も、子供たちも10人全部。その上、かゆい腫れ物ができて、最悪の状態になってしまう。友達までも、「お前は何か悪いことをしたんじゃないか？ だからこんな目に遭わされるんだ」と口々に言う。ヨブは今のおばさんのように、これ以上はないという苦しいところを通された。でもヨブは神様をのろわなかった。神様はきっと助けしてくれると信じていたんだよ。神様は、

この逆境の中でのヨブの絶対的信頼を見て、最後は今までよりももっと大きな祝福をもってヨブを幸せにしてくれた。神様はヨブを嫌いだからとか、そういう理由でつらい目に遭わせたわけじゃなかったと思うんだ。それは神の試練だった。ヨブにはこの試練が必要だったんだと思う。

ナレーション

信吾の話をじっと聞いていたお婆さんは、しばらく頭をうなだれていた。ヨブの話は、もちろんおれにも初めてだった。もしそれが“試練”だとしたら、その目的は何なんだろう。そんな思いでおれたちが見守る中で、お婆さんはつぶやくようにこう言った。

キク子

なぜ神様は、そのヨブって人をつらい目に遭わせたんだらうね。

信吾

多分神様は、ヨブのことを愛していたからだと思う。

キク子

(意外そうに)愛しているから？

信吾

本当の神様はね、お婆さん、僕たちのお父さんなんだよ。お婆さんは息子さんを愛していたよね。息子さんが成長するには、優しくしているだけではダメだったんじゃないかな。時には怒ったりもしたと思う。亡くなったお父さんの分もね。でもそれは息子さんを愛していたからなんだよね。神様もそれと同じなんだ。お婆さんを、そして僕たちを愛しているから、成長するために大きな試練に遭わせることがあるんだよ。それに、今のお婆さんの苦しみを、だれよりもよくご存じだと思う。

キク子

……

信吾

神様はね、僕たち一人一人を心から愛してくださって、僕たちの心の中の罪を許すために、ご自分のただ一人のみ子イエス・キリストを、十字架の上で身代わりに死なせたんだ。それしか、神様のもとに僕たちが帰っていける道はなかったんだ。だからお婆さん、神様は、たった一人の息子を亡くしたお婆さんの気持ちは、全部分かってる。そして、お婆さんが立ち直って、試練を乗り越えるのをきっと待ってると思うんだ。

ナレーション

そうはなす信吾を見て、おれはびっくりした。そこにいるのは今までの信吾じゃなかった。彼が熱っぽく話す一言一言が、お婆さんの心の中に響いているのが分かったのだ。そしてイエス・キリストの十字架の話は、遠い日に教会学校で聞いたおれの記憶をも、今、リアルに呼び覚ましていた。

信吾

お婆さん、今までつらかったね。でもお婆さんの隣には、いつも神様がいます。だからもう死のうなんて思わないで。今お婆さんが死んだりしたら、一番悲しむのは息子さんでしょう？ じゃあ僕がお婆さんのためにお祈りするね。一緒にお祈りしよう。

ナレーション

そう言うと、信吾はお婆さんの手を取って祈り始めた。おれも、香も、思わず自然に手を組んでいた。

信吾

天の神様。今日はお婆さんと僕たちを会わせてくださってありがとうございます

す。おばさんは、この大震災でただ一人の息子さんや、多くの大切なものを失いました。その悲しみをあなたはご存じです。どうぞこれからいつも、おばさんの隣にいて助けてください。そして早くおばさんがこの悲しみを乗り越えられますように導いてください。

ナレーション おばさんの目から涙がポトポト落ちていた。信吾も、香も、おれも泣いていた。祈り終わると、おばさんは一言「ありがとう」と言って、避難所へ帰っていった。それから2、3日して、おれたちのボランティア活動は終わった。

香 あつと言う間だったわね。やっぱり帰るの寂しいな。

啓太 ほんと、もうちょっといたいって感じ。

信吾 また来ようよ、絶対。おれたちにもできることってあるんだからさ。

香 そうだよな。

啓太 うん、絶対来よう!

ナレーション そう誓い、おれたちが車に乗り込もうとしたその時だった。

キク子 ちょっと待って!

ナレーション その声に呼び止められて振り向くと、キク子おばさんが走ってきていた。両手には2つのリンゴを持って。その顔は、確かにあの夜のおばさんとは違って明るかった。

キク子 よかった、間に合って。いろいろありがとうね。わたし、あのあと避難所に帰ってから、久しぶりにぐっすり眠れたの。今までと何かが違うのよね。まだつらいけど、とりあえずお礼だけは言わなくちゃと思ってね。はい、リンゴ。これしか今は持っていないんだけど、よかったら食べて。

啓太 ありがとう、おばさん。

香 頑張ってるね、おばさん。

信吾 お祈りしてますから。

(効果音) (エンディングBGM)

ナレーション あれから半年。阪神大震災のことは、おれたち東京に住む者には、もう昔のことのように思われてしまっている。でもおれは忘れない。あの震災で多くの人が悲しい思いをしたこと。そして何を指してこれから生きていけばいいか、分からなくなった人も多いこと。でもその中で、死のうと思っていたキク子おばさんが、今元気になって頑張ろうとしていること。おばさんを元気にしてくれたのが、きっと神様だったこと。…おれは決して忘れない。

啓太モノローグ (手紙)おばさん、お元気ですか? おれも香も信吾も元気です。おばさんからの手紙、うれしかった。おばさんは、もうあの時のおばさんではありません。おれも、今まで信じてなかったけど、神様はいるんだね。そしてきっと神様が、おばさんを変えてくれたんですね。これからも、おばさんのこと、覚えています。神様が、いつもおばさんの隣にいてくれるように…。 (完)